慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「都市問題」一考察
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1930
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.24, No.2 (1930. 2) ,p.168(64)- 209(105)
JaLC DOI	10.14991/001.19300201-0064
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19300201-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「都市問題」一考察

奥井復太郎

序

學術研究、殊に社會科學研究の施設に關係せるものは其處に取扱はれる「都市問題」又は「都市經濟論」なる名稱の下に何を理解するか、大仰に云へば、是等の「問題」又は「論」の研究對象が社會科學研究の對象となり得るや否や、なり得るとせば如何なる意味に於いて果して然るか、從つて是等の「問題」或ひは「論」が上記の社會科學研究に關する施設の項目中に當然或ひは如何なる程度に包含せらる可きものであるか、等に就いて先決的知識を持たねばならぬ。

しかるに、單に「都市問題」と稱し「都市經濟」と稱すれば、或者は經濟發展の階段說に於ける「都市經濟」を思ひ、或者は「都市」を組織せられたる都市、經濟を家計の意味に解して國家財政に對して地方財政、即ち都市財政の意であると考へる。或者は又、經濟の意味を稍廣義に解して行政或ひは經營又は施設と解し、地方公共團體、殊に都市自治體の活動の全般を理解するであらう。即ち都市行政、都市經營の意味と同じである。

同時に「都市問題」にしても、或者は「都市に關する諸問題」と廣義に解釋するであらうし、他の者は「都市自治體に關する諸問題」と解釋するであらう。

要するに、凡べての場合と同じくかゝる名稱は內容が極めて曖昧である。そして各論者は自己の見解に從つてそれ〴〵の內容を附與してゐる。大體に於ては「組織體となれる都市」の經濟又は諸問題と解するに一致してゐる。之れに對して別個の觀方を示し、そのいづれが吾々研究の主題たりうるの性質を持つてゐるかを示さうと思ふ。こゝに云ふ別個の觀方とは所謂「社會學的」研究に屬するものである。

一、都市とは何ぞや

先づ第一に都市とは何ぞやの定義が定められねばならぬ。今、此の定義そのものが多樣である。統計學的標準、政治學的稱呼、經濟學的定義、地理學上の名稱等々、吾々が日常都市と呼ぶ存在に就いては世間的ではあるが、周知共通の了解があり乍ら、此の存在の持つ多面性の結果、全包的な解釋が下され難くなつてゐる。殊に今日「都市問題」と名づける研究の對象となる所謂大都市に對して吾々が與へる都市、又はシティー、シュタットなる同一の名稱を恐らくは、かゝる、研究の對象と爲らざる、又は成つたとしてもあまり重要の部分ではないと思へる、小さな存在にも與へてゐる。其の結果、各方面では、大、中、小の都市を別け、ミリオーネン・シュタットと呼び、メトロポリタン・シティーと呼ぶ樣な細分の必要に迫られてゐる。茲に於いて吾々も矢張、研究の對象とする都市とはどんなものか、又吾々の研究目標となる都市とは上來、都市と稱せられてゐるものゝ色々の種類中、その何づれに該當するものであるかを明らかに定めねばならぬ。以下に先づ此の點の考察をはじめよう。

（イ）定住

都市とは地球表面に、現實に立つてゐる人間定住の一形式であるに相違ない。地表と云ふ條件は必ずしも重要なものではない、人間の生活が地中又地球以外の天體上或ひは虛空の間となる場合があるかも知れない。故に「現實に人間が立脚する場所」ならば何處であつても差支ないが、從來の歷史と現在と、そして空想的ならざる將來に於いては確かに地表にのみ限られてゐる。而して都市は「定住の一形式」である。定住とは何ぞやと云ふ事が一問題であり、その「一形式」とは何ぞやは又他の一問題である。定住とは一定の地點に相當長い期間、計畫的にたてられた生活のプランによつて居を定める謂である。その地點で生活を營むを計畫的に相當永い期間に渡つて行ふを云ふ。此の定住なる觀念は、具體的には相對的のものであり又或る意味に於いては歷史的關係に於いて特に云々される性質のものである。後者の意味では即ち、遊牧漂浪生活に對して定住と云ふ。從つて人間の生活形式を分けて一定の地點に住居してゐるものと、各所に轉々移動しながら生活するものとにする。前者を定住と稱し、都市現象は此の定住の一形式だと云ふ。更に此の觀念が相對的なのは、長い歷史の間には、時間經過の長短こそあれいづれの生活も變化移動をうける。此の變化移動は、地理的及び人口的に觀察しうる。

後者から見れば個々人間が移動變化する。地理的に見れば、某の地點そのものが、人間の居地となり或ひは居地とならなくなる。人口的に見れば、定住現象は今日なほ盛んに相對的である事を示してゐる。例へば賃銀勞働者、俸給生活者、殊に官公署或ひは對外取引に關係のある私人會社或ひはは、內地支店の多い會社等に勤める者は、さながら古代そのまゝの漂浪生活を送つてゐる。しかし吾々は此の種の現象を以つて「非定住的なるもの」とは思はない、是等の所謂萍草生活も「定住」の反對觀念の中には之れを加へ得ない。何故かと云へば「定住」の觀念は人口的にみれば個人的でなくて社會的である。又前に云つた言葉を用ふれば地理的である。一つの土地が同一社會に屬する人々によつて永く居住せられる事である。其の上に住む人口(個人的)動勢を問題としない。甲が去つて乙が來ても問題でない。唯、此の場合、其の土地は同一社會の內にあつて依然として從來のまゝの形式に於いて存續する事を必要とする。甲の民族(或ひは種族)が去つて乙の民族或ひは種族が、以前のものと有機的社會的連絡なしに、此の土地にあらはれる、其の土地そのものは人間の居地として依然存在する……かゝる事情は必ずしも「定住」とは云ひ難い、遊牧時代にもかゝる形式の「土地繼續性」は存在し得たであらうから。故に「定住」とは地理的社會的に見ればある地點が、全社會生活の上からみて一定の意義を有し、此の意義に從つて、此の社會に屬する人々が(その人々が變化移動するのは差支ない)各自生活を營む根據として、定められたプランに從つて、相當長い期間其處に居を定める事である。換言すれば同一社會に於ける土地利用の連續性に附帶する居住形式である。かゝる地點は、個人生活の見地からではなく、社會全生活の見地からみて、生活の基礎として、生活を營む土地として、或る繼續性を有する事となる。之れが定住である。從つて勤勞階級の個人的動靜は問題でない。唯、此の場合にしても社會そのものが變化するが故に、かゝる繼續性も全體として相對的のものであるのを免れない。

（ロ）定住の諸形式

次に定住の形式問題である。元來都市聚落の現象は相當に廣い地域に擴がる社會生活の營まれるに到つた時代の所產である。一部落位の廣さをしか持たぬ生活が全社會だと云ふ樣な考方に於いては、都市なるものが成立して來ない、勿論、

大社會に於ける都市と類似な地位を是等小社會内に求め得ない事は無からうが。（例へば、部落の中心になる家、多くは有力者又は酋長の如き者の邸であらうが、其は大社會に於ける都市的存在に該當するものであらう、何故ならば色々の生活交渉が部落の各戸各家と此の中心とを結びつけてゐるであらうから。）されば都市とは社會生活が相當に廣い地域（民族又は種族）に擴がりを持つに到つた時代の現象である。此の結果として、全地域は色々の聚落形式によつて模様づけられる。之れが都市、村落等の聚落形式上の岐れる所以となる。即ち都市とは是等聚落中の一形式である。而して此の形式が説明せられゝば、聚落としての都市は定義されるわけである。是等聚落は定住者數の數的觀念によれば密集の程度を以つて區別せられる。しかし、此の場合地理的面積をのみ問題とする事は出來ない。矢張、一聚落を或る「一體」として考察して來なければならぬ。比較的獨在性を保持してゐる居住形式に、一軒家がある。之れは本來からみれば聚落ではない。しかし、人間居住の一形式には相當ない。社會生活が複雜になると、純粹な一軒家的存在は少なくなる。是等は相互に相當の隔りを持つて（地理的にも、社會的にも）ゐるにも

拘らず、緩粗ながら、他の存在と結びついて、一部落を構成する。此の部落の聚落密度は是等散在的に居を占め乍ら、何等かの共同の結帶によつて日常生活上連結されてゐる各戸の數と、それ等が占める面積との比例である。此の場合現はれる密度は、此の社會或ひは一團體に屬する各戸の地理的距離が相接近するに從つて、次第に粗から密になる。此の密なるものゝ標準的最高が即ち都市である。故に聚落形式から云へば聚落人口の密度が都市と然らざるものとを決定する。但し此の場合に於いても前述した樣に色々の豫備條件がある、即ち、一聚落を獨立單位と勘考する標準、例へば日本一國を取扱つたのでは、聚落密度は出て來ない。一地點に成立してゐる聚落を獨立の一團體と考へて、之れが占める地面積と人口とを比較するのである。從つて茲に、純地理的以外の考慮が加へられる。東京、大阪の如き大都市から地方の大中小の都市又は町村に至る迄で、各〻それ等はそれ自體として、特別の一體として取扱はれなければならない。普通、此の取扱方は政治行政上の區別である、今日地方團體の人口密度を云々する場合、一國の人口密度を云々する場合に、其の國の主權の及ぶところを以つて基本とする樣に、行政上區分され

た各地方域を以つて基本としてゐる。此の事の可否は兎に角として、かくの如く聚落形式、從つて聚落密度から云へば、必ずしも、聚落觀念から丈けで都市の特長を決定し得ないと云ふ事丈けは確かである。例へば密集聚落の程度を純地理的空間的に求むるならば次の如き方法があらう、即ち近隣相接するの狀態に就いて標準を設ける事である、民屋櫛比とか「Wand an die Wand」とか「月も屋根より屋根に入る」とか等の句はいづれもかゝる標準に基いた形容句である。此の點に於いては世間慣用語は純空間的地理的標準に基いてゐるとは云へ之れ丈けでは都市聚落の全部を盡し得ない事明瞭である。

即ちかゝる標準を用ひても更に民屋の絶對的多數を示さなければならぬ、數千、數萬の家屋が、かゝる形容句に示される樣な狀態にある時、之れは或ひは都市聚落そのものである場合とならう。しかし、數千數萬の民屋がなくとも近隣は相接しうる。逆に、田園都市郊外住宅などについては、近隣は田舍町の家屋程も相接してゐない場合がある。要するに、是等の標準は、他の標準又は觀念を援用せずには、單獨では不充分たるを免れない。

兎に角都市は人間聚落の一形式である。而して聚落模樣中の一模樣である。都市は全社會生活の所產表現であるが故にどうして、かゝる模樣が出來るかと云ふ事は色々の條件によつて定められる。いづれにしてもある一地點の包含する人口數を比較的に多量としその人口密度を稠密せしめる樣な諸種の條件に基いて指示せられる地點である。是等の條件は何ぞやに就いては次に述べる。唯、今一つ注意を要する點は前にも述べた通り、都市現象は、全社會生活の地面上の表現として、大社會生活中の一部分的表現でなければならぬと云ふ事である。換言すれば地域面積としての全社會生活と地點現象としての是等の聚落現象とが對立しなければならぬ。（此の地點は幾何學的正確さを持つた觀念ではない。換言すれば位置のみを表示して大きさを持たぬ嚴密に云ふ「點」の所在ではない。）何故此の對立を重要視するかと云へば、都市とは、此の面積上の生活である全社會生活の神經中樞又は血脈中樞に外ならないと考へるからである。前にのべた樣に一軒の家屋に就いても、家族生活の場所的中心を語る事は出來よう、散在部落、未開土人

の聚落(比較的小面積の)に就いても彼等の生活の重心となる特殊の家を指示する事は出來よう。しかし、之れ等から丈では如何にも都市の觀念を引き出し難い。今日吾々が一般に都市と考へる存在に就いてみるならば、どうしても、大社會生活(廣面積――領土内の生活)の中樞的表現が、その地域面積の或る地點に表出されると云ふ事に限らねばならぬ。しかし、かゝる抽象的な定義も、それ自體には可なり包括的で、普通都市とは考へられない樣な存在をも都市又は都市的存在と考へうるのである。例へば經濟學的見地に從つて都市を商工業的聚落と解するならば交易經濟組織成立以前には都市はない筈である。しかし、其の頃(歴史的に云ふ事であるが)既にミヤコの存在は無かつたであらうか。非經濟的生活にして、しかも全社會に通じてゐた生活には、その社會生活の中樞が成立したであらう。此の事は既に本誌に於いて「獨逸都市研究序論」の中に述べておいた。

（ハ）都市を決定する諸條件と決定的標識

都市とは一定の地點に現はれた聚落社會である。次に如何なる聚落社會であるかによつて都市を定めなければならぬ。此の生活集團の特長は何かと云へば、そは、此の地點に集合する人々の生活内容を分析してみれば明瞭となる。經濟上から見れば、農業的色彩に乏しく、商業的色彩に富み、工業的色彩も亦可なりの程度に於いて加つてゐる。學藝によりみれば、其の國の學藝の中心を構成し、從つて、其の制度施設の内に生活する人間が多い。又其の生活程度が高い。政治上からみれば、住民の政治的知識の問題を別にして、矢張、政治組織の中、其の最も重要なるものに關係する人々があり、又其の數も多い。消費生活からみるならば、かゝる聚落は其の施設に於いて斷然他の聚落と隔絶してゐる。此の外、精神生活、生活形態、其他の點に色々と其の特色は現はれよう。此の都市生活と生活の特殊相との研究を稱して Urbanization の研究と云ふ。

しかも是等諸特色即ち都市決定の諸條件の列擧主義は、都市本質の決定に對してあまり重意義なるものではない。例へば「此方に農業、彼方に工業」が營まれると云ふ事を指摘して都鄙を對立させる方法は、一方法には違ひないが、如何にも、社會生活全般を通じての特殊相をつかんだ有機的機能的の統一性に缺けてゐる。こゝに、是等都市決定の具體的諸條件の裏に横はる一個の根本的動力を認めて、都市

とは、組織化された社會生活の機能的中心所在地であるとする。此の社會生活を特に限つて經濟生活とか政治生活とかに限定する必要はない。一般社會生活の機能的中心の地理的表現である。唯、茲に云ふ社會とは特殊社會でなくて、全體社會の謂である。從つて、全體社會の發展擴張によつて機能的中心も變化するわけである。國民經濟社會に於ける都市即ち機能的中心は都市經濟時代封建時代のそれ等とは自ら異なる。しかし機能的中心たる性質は兩者共に同一である。全體社會を想定する事は、地點に對して廣い地域又は領域を想定するところである。

從つて機能的中心とは、

（一）或る廣面積の領域内の一地點にして、

（二）他の諸地點に對して系統的連絡を有し、

（三）此の系統の中樞的地位を占める、

地點である。「其の地點に全社會的交通が結びつけられてゐる」と云ふのは此の意味である。しかし之れに對する疑問の一つとして、例へば分業組織内の經濟活動の一種目が或る地點に於いて行はれてゐる、と云ふ事丈けで、直ちに之れを機能的中心と云ひ得るか。即ち、灘の釀酒は全國的に關係してゐる仕事である。關東關西、其の他諸地方へ供給せらる可き清酒がこゝで生産される、其れ故に「灘と云ふ所は全國的に關係し、從つて機能的中心である」と云ひうるか。生産關係に於いて、分業が盛んになれば結局一特殊貨物の生産地は、直ちに全社會的意義を持つ事になる。しかし、之れを以つて直ちに機能的中心とは云へない。經濟的機能の中心とは、是等分業的特殊的存在を結びつける所の存在でなければならぬ。一方特殊生産地と關係し他方之れを全國乃至諸地方に配給する組織を持つた地點が即ち之れである。之れは單に配給の中心と云ひ得るかも知れない。しかし、各地方に於ける生産企業は、根本的決定を金融市場其の他の關係から、是等所謂配給の中心地に俟たねばならぬ事となる。此の意味に於いては單に生産諸貨物配給丈けの中心ではない。全經濟生活の機能的中心である。其の社會に於けるあらゆる需要供給が此の地點に集められ、その情勢如何の決定する所に從つて、生産要素或ひは生産物其の他、いづれも就く可き場所赴く可き土地に赴く。「市場」の觀念は嘗ては地點的意味であり、又一時は抽象的觀念であつたが、茲に於いては再び地點的意義

（但し市場廣場マルクト・プラッツなどに現はされる場所的のものではないが）を持つたものとして取扱はれる。軍事的に見れば國軍總帥の所在は機能的中心である。國軍の軍隊の大部分を構成する壯丁が特定の一場所から選出される、と云ふ事は問題でない。斯かる場所から一定數の壯丁を選取し、之れに訓練を施しめ、斯々の軍隊、斯々の地方に分ち送り、斯々の方針を以つて斯々の軍事勢力を有する事を決定する機關の所在が機能的中心である。同じ全國的意義を有するにしても、分業的意義を有する地點とかゝる中心點とは區別されなければならぬ。此の關係を次の樣に云ふ。機能的中心とは全國の各地點に脈絡を有する地點であり、特殊的分業的地點の全國的全社會的意義は、前者、即ち機能的中心を通過する事によつて具體化するものであると。神經系統又は血管系統の一局部に生じた毒素が全身的意義を有するには、一應其の中樞機關を經なければならぬ。反之、中樞機關は直ちに全身的意義を持つ。機能的中心とは、此の後者の意味である。此の點は即ち「獨逸都市研究序論」の中に述べておいた。再び繰返す必要はないと思ふが、斯くの如くして、都市とは社會生活の比較的高度の機能的中心である。比較的なる文字を用ひる所以は、時代的に都市を限定せざる限り、又、極めて偏狹な方法によるを甘んぜざる限り、都市觀念が冒頭に述べた樣に可なり相對的のものだからである。世界的都市（ロンドン、ニューヨーク、パリの如き、又伯林、東京、大阪を加へうるかも知れない）內國的大都市、地方的都市等、いづれも機能的中心の比較的高度によつて定められる問題である。地理的空間的に云へば、全國的都市は共の社會に於いて殆ど全國の機能的中心でなければならぬ、例へば大阪東京の如き、是等は機能的中心の比較的高度の大なるものである。次に社會諸生活からみれば、諸機能の中心が一點に會してゐる事、これ又、比較的高度の大なるものである。特殊の事情を除けば、諸般の機能的中心は一點に會する傾向がある。政治、經濟、學藝、或ひは又宗教の如きも共の機能的中心の所在地を空間的に單一にする傾がある、共の結果、一地點の機能的中心は空間的にも諸系統的にも益々高度化する傾向を有する。

此の定義及び限定からして今日「都市」とはどれかと云へば國民經濟社會、國民國家社會に於ける機能的中心として首都並びに之れに對立する數個（僅少な）大都市

がそれであると答へうる。他の弱少都市は之れに附隨するもので中心勢力を構成しない。故に今日一般に取扱はれてゐる都市問題と云ひ都市經濟と云へば主として國民經濟社會に於ける都市現象即ち是等大都市に限られた性質のものではあるまいか。勿論、此の大都市主義に對する反動は存在する、殊に都市計畫の方面に於いては Town Planning for Small Communities があり、理想運動としては小都市運動田園都市運動がある。が、いづれにせよ近代都市問題は、今日の大都市を以つて發生し之れを對象とする研究であるに異論がない。即ち今日の都市とは國民社會に於ける最も高度に集中された機能的全國的中心である。

二、都市社會の性質

都市を以つて組織せられたる全社會の生活關係の機能的中心所在である、との定義から、更に進んで吾々はかゝる都市と云ふ生活集團は如何なる性質の社會であるかを明かにしたい。

如何なる動機を以つて其の地點に集つたかの點を度外視して、社會は一個の地域的に限定された、社會を構成する。此の社會構成は他の社會構成に對して對偶交叉反撥等の關係に立つものであらうが「一定の地點に共同生活する」と云ふ意識から結合した、緊密乃至粗緩な一社會を構成する。之れ一個の地域社會であつて、社會は元來一の地域の内に立つ空間的關係であり、換言すれば、社會とは距離の關係ではあるが、吾々が都市社會に就いて云々する時、殊に「地域に限定された、その内部の共同生活者」と云ふ點が强調される。之れ唯單に都市ばかりでなく、一國、地方及びその他諸聚落に就いても同樣である。此の場合常に「地域」と云ふ觀念が高唱された社會觀念である。

都市社會の結合觀念は「市民」の觀念である。今日市民 Citizen, Bürger の觀念は地方的のみでなく、公民の意味に用ひられる、しかし、こゝで云ふ市民とは「一聚落の地内」に住む相互的意識である。此の意識を持つた人々の恒常的關係が都市社會である。以下是等の諸點に就いてなほ詳しく明瞭にしたい。

一、生活集團　吾々は一人の生活を二方面或ひは三方面に分ける。職業的利得的方面と消費的方面と此の外に利用的生活である。此の第三方面は生產消費の二大別のいづれに直接、決定的に關係あるかゞ明瞭でないものであつて、兩種の關

係が事情によつて交互に現はれてくるものである。かゝる區別が如何に重要であるかは、後段に於いて明白にせられるであらう。生活集團に就いても此の諸方面の認識せられるのは當然である、前者は生産組織の内に、後者は消費組織の内に包含される。而して人々の居を占めるや、如何なる土地を選ぶかも、當然、此の兩方面の事情によつて決定される。人は職業的利得的生活に於いては、或ひは農夫として、或ひは商人として、或ひは職人として、或ひは勤人として、或ひは家庭勤務者として、或ひは各種生産要素、資本の所有者として、各々それ〴〵の職業の關係する産業の營まれる土地に赴く。此の際、是等特殊の決定的考慮以外になほ別の一つの考慮となるのは是等の土地が、如何なる消費組織を有するかと云ふ點であり、當然、彼等は此の方面に於ける利害をも斟酌する。而して特殊の場合、例へば保養地療養地、景勝地等を除けば、土地の分業は主として生産組織に於ける分業であつて、生産上に於ける土地利用に基く分業である。生産經營の立脚地としての土地分業である。原則的には消費組織に於ける分業は無い。寧ろ消費生活に於いては、其の地方々々の生活集團の資力が何處の程度迄、各々自己地方に充分なる消費組織

或ひは施設をいたしうるやに依るものであつて土地本來の性質による所でない。此の關係は頗る人爲的である。勿論生産組織に於ける土地の分業性としても、或る程度迄では人爲的である。例へば、利用せらるゝ自然力は、經濟社會の發達せる今日、大體に於いて、人力改良を經たるものである。人智が適用されてゐると云ふ意味に於いては、殆ど凡べてが人爲的である。しかし、依然、生活組織に於ける土地の性質は、その分業の決定的原因である。漁場、礦山、農場、牧場、開港場等々に到る迄、主として自然的條件が決定的である。政治上、宗教上の樣な場合に於いても（軍事的にはなほ更有力に）自然的地理的條件が相當に働く。反之、其の土地の消費組織に於ける性質は、主として、其の土地に赴く人間自からが之れを携へるのである。定住者自からが之れを決定するのである。勿論、定住者の資力及び富は、其の土地が生産關係に於いて有する意義と相俟つ所大ではあるが。

此の生産組織上に於ける特殊性と消費組織上に於ける普遍性とは、都市社會の態樣を決定する重要な關係である。例へば郊外住宅の如きは、此の兩關係によつて說明される。大都市の隣接地方でなく、數十哩を隔てたる地方の大都市的關係

も生産組織上と消費組織上の兩關係を以つて理解せらるゝ存在である。是等の地方の住民は、少くとも、生産組織の關係に於いては、當大都市そのものに直接的關係を持つてゐる。彼等は嚴密な意味に於ける是等大都市の「市民」ではない癖に、之れに對して市民的關心を持つ。又是等の大都市的遠隔地方それ自體には都市的ではない。しかし是等の地が有する消費施設（又は消費的利用生活）の關係からして、大都市の市民の或者は、是等の地方に居住して生活を營む。彼等は本來大都市々民であるが故に、其の趣味思想が市民的である、從つて是等の地方を「都會的」にする事に躊躇しない。是等の事情からして、都市現象及び都市的現象は行政區劃としての都市內部に限られなくなる。しかるに公共自治團體の活動は其の行政區劃に制限される。此の關係はどうしても都市の大都市化を促す動機となる。近接市町村の合併と云ふ事になる。實に以上見た樣に、大都市の生活は單に半徑幾哩かの本來の都市自體の區域に限られないで交通の完備と共に數十哩の遠方地點が日常生活上に於いて大都市に不可分の結合を有する事となる。是等遠隔地の住民は彼等の日常生活に於いて、將た又、其の基本的部分に於いて大都市的であるが故に、其の居住地の住民意識と共に大都市の市民意識を持つてゐる。それ故に、市民意識の、日常生活中に於いて及ぶ範圍をその大都市の區劃とするならば是等の地方も亦、大都市地域に入るのである。此の點に就いては異論があるかも知れない、勿論是等の地方には大都市と日常生活上關係のない土着人士がゐる。彼等は寄留者の樣に大都市市民意識を持たぬ。反對に其の地方々々の市民意識は、外來住者のそれよりは强烈なものがあらう。斯くの如く土着人の觀念には多少異つた色彩があつても、是等大都市從屬の地方は、大都市の市民意識を持つて、其の地に來住してゐる分子の益々多きによつて、今日在るがまゝの狀態を呈出し、又その爲めに、然らざる場合に於いてある所のものとは、全然異つた存在と化するに到つてゐる。

生活集團を取扱ふに際して其の二方面を區別する事の重要なのは、自治體政府の活動方面に或る特色を與へる點である。先に述べた樣に、特殊の場合を除く以外には、經濟上では都市は生産組織に於ける分業的存在で、消費組織に於いては、地方的統一的であるとのべた。即ち此の關係の結果、都市に於ける生産上の活動は、

超都市的に決定せられるに反し、消費組織上の活動施設は都市的に地方的に決定される。之れが今日都市政府(其他地方公共團體)の行ふ施設活動の特色を説明する根本原因である。此の點は後段に述べる。

二、市民意識　市民意識が都市社會の中心的紐帶的觀念である。此の意識は、其の土地に集まつて各々生活を營む事實の認識に基いて起る意識であつて、日常生活を營まない、外來的分子(例へば商用又は遊山的の外來者の如き)は此の土地に就いての市民意識を持たぬ。反對に前節に述べた樣に地理的には相當遠隔の地(例へば數十哩離れた地方)でも、社會關係とは、一つのコムユニケイションの關係であるが故に各々日常生活を中心大都市に就いて營むとあらば、是等地方在住民の間に、大都市の市民意識を生ぜしむる。社會的關係は距離の關係ではあるが、純地理的の遠近ばかりを問題にする必要はない。交通と云ふ事が物理的距離の長短を著しく調節する。從つて大都市環圈を必ずしも地理的遠近によつて限る必要はない。しかし、相對する兩大都市の間に、双方に就いて日常生活を營む人々の市民意識は双方に屬するとは云ひ難い。例へば大阪の商人は、其の營業の關係上、東京に極めて頻繁なる關係を持つてゐるかも知れないが、彼は大阪市民であつて東京市民ではない。蓋し彼の東京に於ける關係及び活動は、大阪に於ける生活々動によつて規定されるからである。大阪に於いて斯々の生活を營む、其の必要上東京との頻繁なる連絡が出來る。勿論彼は東京の問題に關して、東京市民自體の或者よりも熾烈な關心を持つかも知れない。しかし彼はどこまでも大阪市民である。

故に市民意識を中心として都市の延長外延を決定する事が出來る。唯、此の決定方法は社會學的方法であり、又經濟學的方法でもありうるが斷じて、行政的或ひは地理的ではない。

市民意識は、共同生活の認識からと云つたが、こゝに、前節に述べた生活の生産、消費の兩方面の別個的關係が同じく影響する。生産活動に於いては都市は組成的一部分であると云つた。從つて此の生活內容の認識による、市民意識に就いては、有力な市民的關心を生ぜしめない場合がある。換言すれば、此の關係に於いては、各個の關心は、機能的に團結しやすい。詳しく云へば、此の生産組織に於いては、各都市の態樣は超都市的即ち全社會的經濟的勢力によつて決定される。此の關係

に働く人間は、同樣の勢力をうけてゐる、彼等の關心は此の勢力の規定する所に從ふ。其の都市が有する、分業上の特色を發揮するについては、此の產業に從事する者の利害關係は一致する事があらう。しかし、生產組織の內部には、かゝる水平線的統一の內に直垂線的階層がある。此のヴァーティカルな階層に就いては各個の關心が一致しない。此のヴァーティカルな關心階層は、そのまゝ橫に延びる、即ち地理的區劃障害を超越する。此の場合、即ち「同じ土地に生活する隣人」よりも遠つた土地にある「仲間」に有力な吸引力を感ずる、即ち地方的共同生活の認識はあつても、此の方面生活關心からみて、市民精神、市民意識は有力となり得ない。かゝるが故に、今日の大都市は固有の市民精神を失ひ或ひは弱めてゐるのであり、又經濟生活の組織が、國民經濟的、世界經濟的である限り、各都市の此の方面に於ける獨自的組織的活動は望まれないのである。何人も今日の大都市に於ける組織的活動が生產的產業的方面に向いてゐる事、極めて僅少なのを見るであらう。繰返して云へば、生產組織の關係する限り、都市は、超都市的勢力によつて決定される所が大であり、市民も此の超都市的勢力によつて左右され勝ちである。

反之、消費生活は、全く地方的なものである。又全社會を通じて異質的組成でなくて、同質的のものである。此の故に、消費生活に就いては、各地方民は或る程度まで鄕土的好愛を有し得る。勿論今日の如く地方自治團體が、其の公共的勢力を利用して其の土地の改良施設を行ふに當つては、此の施設改良が土地によつて優劣を生ずるのは免れ難い。しかし此の事は市民的關心をそれ程迄重要に害するものではない、要するに是等の施設諸般は市民の經濟上の能力、文化的發達によつてその完否が決定するのであるからして、生產組織の場合に於ける如く、超都市的關係に律せらるゝものでは無い。此の點の關心に就いては或る程度迄有力な市民意識を發生せしめうる。

本來は生活を生產消費の兩方面に大別して差支ないものであるが、こゝに中間的現象として所謂「利用生活」なるものを設定しておいた。しかし之れは獨立の現象でなくて、生產消費の双方の關係のいづれかに立つものである。而してそのいづれに關係する事は誠に識別し難いのである。例へば朝夕の通勤は、或る意味から云へば生產關係のものであらう。しかし同時に消費關係に利用される。故に

生産的方面とは本來の職業的利得的なる生活にして、之れを彼が或る勞働者として、或る俸給生活者として、或る獨立職業家として、生ぜしめる所得發生の過程に限らうとするのである。何故にかゝる窮窟な解釋をとるかと云へば、組織せられた都市の施設活動の性質を生産的又は消費的に區別する必要上である。大體の傾向として今日都市政府の活動は生産組織に關係するところ極めて少ない。都市經營の諸項目をみると大部分が消費的關係の性質のものである。或ひは生産的活動に間接的に寄與しうる利用施設（環境の改善）の方面に限られてゐる。此の環境改善の施設にして全國的或ひは生産的寄與に關係ある部分については、全國的努力が此の土地に投入される事、國庫補助制度の如きものゝ存在によつて立證しうる。交通機關、道路等の如きは生産、消費いづれの方面に分類すべき施設であるか一寸解釋し兼ねる。實際的に見ればいづれの用途にも供せられてゐるのである。故に或る通勤勞働者が其の市營電車に不平を有する場合、吾々は、彼が生産關係に於いてかゝる不平をのべるものと解釋しない、同樣に鋪裝道路の不備に就いても、生産關係即ち利得生活の關係として不滿を表はさない、市民として生活する上に於いて各〻その不便その不備を云々するのである。反之、市營電車從業員として市當局の取扱ひ不當に對しては、勞働組織に於ける、一賃銀勞働者として抗議を提出し、勞働階級の意識を以つて之れに當る、相手が市自治體であると個人會社であるとを問はない。此の場合彼の生活意識は市民的ではない。故に、是等の公官業從業員の同盟罷工其の他の勞働爭議に際して、市民的觀念の沒却、市民的反逆を以つて彼等を責むるのは失當である。勿論他の市民の蒙る迷惑は充分多い。故に他の市民から（他の市民は是等施設を生活に利用してゐるのだから）「市民に迷惑を及ぼす者」として難詰されるのは當然である。しかし此の爭ひは、茲で云ふ「市民對市民」の爭ひでなくて、生産關係者（即ち市民意識の比較的に薄い者）對消費關係者（市の直接內外に生活する者）の爭ひである。生産者對消費者の鬪爭であつて簡單に「市民對市民」などとみる可きものでない。是等の現象を注意してくると、如何に生活の兩方面、即ち、生産組織上に於ける關係方面と、消費組織上に於ける關係方面との相違が市民意識に及ぼす影響にも、相當の差異ある事を認め得よう。

斯くの如くして、是等の現象の結論として、都市社會には、超都市的分子として、經濟社會の機能的分子を含むと共に、都市社會そのものは一つの消費組織の關係に於いて市民の渾一的社會を呈する。都市社會に獨特なるものを求むれば（外の聚落に就いても同樣であるが）都市社會とは、此の生活集團の渾一的、地域的結合體であると云へよう。

しかし、前にも注意しておいた樣に、此の生活關係、即ち消費組織上の關係にも市民の利害關係は均一平等でないのである。此の點は階級意識的な現代の著しい現象である、之れを消費の階級性と云ふ、此の點に就いて簡單に述べよう。

消費の共通性とは、殊に、消費組合理論家及び運動者によつて唱へられる所である。消費に就いては萬人共通であると。消費組合運動は之れを其の運動の重心として協同主義の實際運動となる。しかし乍ら、既に或る機會に述べた通り、消費の共通性なるものゝ、必ずしも具體的現實的のものとは云ひ難い。凡べての社會現象を階級性的に見る必要及び可否は別とするも、消費が萬人に共通だと云ふ事は、衣食住は萬人に共通だと云ふ位の意味以外に深い意味を持たない、勞働は萬人に共通だとも、その位の意味では云ひ得るかも知れない。消費そのものゝ內容に就いてみれば其處に幾段かの階層がある。そして、其の階層の各段に就いては上下への自由なる移動が許されない。消費現象に階級性が本來は無とも今日の狀態で例へば、消費組合で金剛石を買つたと云ふことは諷刺句以外の何ものでもないであらう。金剛石は消費組合運動が必要である社會階層の消費項目の中には入つて來ない品物である。一方に於いて消費組合公設市場に或る貴族的な輕蔑が投ぜられると共に百貨店又は贅澤屋での購買に大衆的美望がそゝがれる。かくの如く現實の問題として消費は萬人共通でなくて、少くとも階級性を反映してゐる。

之れを當面の都市社會に持つて來ると、市の公共事業の方針に之れが現はれて來る。所謂民衆的施設が完備するか、或ひは美觀壯麗歷史等が尊重されるか。例へば都市美の問題はもつと尊重されていゝと思ふ、都市政府が此の問題に參加するのもいゝ、併し他面に勞働者住宅改良衛生施設其の他の問題が放擲されたまゝであつてはなるまい。公園は一般市民殊に、比較的に遠距離に遊ぶ事の出來ない

人々にとつて重要な施設である。しかし交通の便益其の他の條件のよくない土地に市營又は同似の大公園を設ける事は、往々にして無用の業となる。かくの如くして都市の活動す可き方面に就いても決して一樣單一且つ全部が調和的とは云へない。民衆的勢力が擡頭するにつれて此の問題は複雜になつて來るであらう。專制君主制下の、例へば近世初期の諸都市が豪壯優美を誇つたのは君主の權勢表現であつたが、此の點からみると現代都市は民衆的勢力が著しく表現されて來た。又戰後英國に於いて住宅問題解決の爲めにする國庫補助の打切りが問題となつた事があつた。是等はいづれも中央政府又は地方政府の施設方針に關して將來相當の抗爭的問題を包含するものである。

何故かと云へば、元來、經濟活動の收益は個人的に歸着して個人的に使用せらるゝ場合と團體的に歸納して團體的に使用せらるゝ場合とがあるが、之れに關する收益分割の鬪爭はいづれの場合でも同じ現象である。總收益の內、全部を個々の手に分割し終る代りに幾部分を組織機關の手に委ね之れを以つて一般的施設に投ぜしむる、從つて個人はそれ丈け收益分配額を減ずるが、組織機關の施設を利用する事によつて、自から經費を投ずるのを免れる。此の場合、是等凡べての給付組織の問題である、此の組織問題が私人企業と官公企業との優劣となつて現はれる。此の問題は組織學の原理及び精神並びに組織學技術等の標準によつて決定せらる可きものである。が、そのいづれにしても各人は個々に有する資力（所得）を自己希望の方面に用ふる、若し其の所得の一部分が公共團體の手に入つて其の機關を通じて何等かの方面に使用せらるゝとなると、各利害關係者は各〻自己の希望する方面に投ぜしめんとする。所謂無產階級が都市政府の內に進出すればする程、此の方面に就いても從來と益々異なつた新傾向を見出し得よう。即ち歲入の方面に於いて如何なる市稅を如何なる程度で如何なる方面から採取するかと云ふ問題許りでなく、かくして得た財源を何に用ふるかに就いても、市民の利害關係は決して調和的ではないのである。

故に消費組織に於いて、生活の關心が一致的である、市民意識は、此の方面を通じては比較的に熾烈であると述べた事も、矢張、相對的現象にしか外ならない。されば前にも或る程度までとの制限的文句を附しておいたのである。

三、「都市問題」の內容及その性質

以上、都市の定義及び性質を論じて來た。顧つてみれば、是等の諸問題は、普通に云はれる都市經濟論の問題でも都市問題の主題でもない。かゝる方面の研究を取扱ふものに、漠然ではあるが稱して都市社會學なる名稱が冠せられる。即ち都市現象を社會學的に考察し、都市の定義を社會學的に決定する所のものである。亞米利加流の Urban Sociology にいづれ程の純社會學的根據が存在するか否かも疑問であるが、他の研究方面と區別する爲めに假りに其の名稱を冠用する。

都市社會學の研究する主義は勿論都市である。社會とは何ぞやから發して、其の定めたる所の社會概念が「都市」にも適用しうるや否やを研究し、更に都市社會構成の社會學的要素及び其の特色を研究する。此の研究は都市發達史をも含ませらる。更に市民生活を主題ともしうる。都市生活に於ける市民の生活特色、大都市の相貌と云ふものを研究する。此の研究は、好奇興味本位に墮する恐れあるが、それ丈け又面白い研究となりうる。此の都市社會學にあつては出來る丈け客觀的取扱ひを尊重すべきであらう、從つて理想都市論は他の項目に加へらる可き性質を持つ。

かゝる都市觀念に對して、組織せられたる都市即ち政治的都市の觀念がある、此の方面に屬する研究課目は、從つて自治體政府及び市民の政治的活動に關する。之れを分ちて、市政組織論、都市經營論とする。

市政組織は Local or Municipal Government であり、都市經營論は Municipal Administration である。是等兩項目は從來市政論と稱せられたものである。

市政組織に就いては、地方自治團體の政治組織を取扱ふ、市政府の組織、市民代議機關の組織、兩者の相互的關係と其の協和とが研究主題である。此の方面に於いては各國いづれも歷史的傳統的色彩を包含する所多い、例へば英國の市會委員會の政治的活用は同國の政治的傳統に負ふ所頗る大である、亞米利加合衆國は英國流の制度に出發して、市會對市廳制度を發生せしめ所謂チェック・アンド・バランス制度の弊害を如實に表現し、爲めに以降は諸種の制度、例へば市委員會制度、市支配人制度を試みて、現在市政組織のラボラトリウムと稱せられてゐる。而して今日に於ける新傾向は、市政の經營組織化の運動である。或者は市の事業は、從來の樣に

「政治」でなくて、政治（カヴアメント）、仕事（ビジネス）、慈善（チヤリティー）の三者だと云ふ。何にを行ふかの問題でなくて、今日都市が行ふ可き仕事の內容はほゞ決定的である、上下水道、防火、交通、保養、敎育等々の諸這の事業が都市政治の手によつて行はる可き事は確定してゐる。問題は、故に、如何に行ふ可きかであり、その經營組織の問題である。從つて經營機關の組織を最も能率あらしむる爲めに、商事企業のそれと同似化すべしとの主張が即ち市政治はビジネスなりと云ふ主張となる。ビジネス一點張では餘りに卑俗なるが故に、なほ正義博愛の高處に立つて見る、慈善（チヤリティー）の一要素が附加される。が兎に角、市民代表機關の制度、その執行機關即ち市政府の組織の問題に就いては能率增加の點より觀察しての「組織問題」が高唱されてゐる。

都市經營論は、都市の行ふ事業の複雜なるに比例して諸種の項目を含んでゐる、市財政はその中最も中心的なものであらう。此の問題中には公企業論と私企業論の利害得失が論ぜられる。パブリック・ユティリディーズの問題が取扱はれる。前者がコレクティヴズム對インディヴヰジョアリズムならば後者は Principles of Public Utility Economics となつて現はれる。實にパブリック・ユティリディーズとは何かの問題も嚴密な解釋を必要としよう。其の他、都市經營種目中に含まれるもの細目について云へば、住宅問題、都市計畫、社會事業、保健保養娛樂施設、防災施設、敎育制度更に交通施設、瓦斯電氣水道の施設に至つては一時「瓦斯と水道の社會主義」(Gas and Water-Supply Socialism) の流行語となつた程のものである。是等諸種の經營事業は一度組織立てらるゝや、公私企業いづれに委ねらる可きものか、として問題の中心となつた。公企業論の最も極端なるものを以つて「都市社會主義」と呼んだ。理想都市の問題は本來、既成都市の經營論中には入らぬ問題であるが、都市を如何にすべきかの一般的問題、殊に標準設定の問題を論ずるに於いては正さに劈頭に論ぜらる可き項目である。更に都市生活の風規其の他に關しての取締、及び都市警察權の問題も此の經營論中に包含される。

經營論の大綱として云ふ可きは、都市の諸般の事業は必ずしも直接に產業的（生產的）ではないと云ふ點である。之れは、既に述べた所からして當然云はれる所であるが、今日の都市自體は生產的產業的寄與を直接計りうるものでない。故に都市の產業行政と云ふ種目、別は極めて貧弱である。何故かと云へば生產關係に於

いては、都市は超都市的勢力によつて決定されるからである。然らば都市經營事業の大部分は消費組織の關係範圍であるか。之れに對しては消費の言葉の意味を限定すれば「然り」と答へられよう。例へば人間の消耗生活が明日の生産活動に寄與しうるが如き意味に於いては、都市の土木事業に現はれた改良事業は悉く、都市體の維持改良をはかる消耗的行爲であるが故に、消費關係に屬するものである。かゝる廣義の解釋を避けんとすれば、都市事業の大部分は、環境改善の事業であると云ひうる。人間の行動及び資財の用途は、直接生産の爲めの用途、直接消耗の爲めの用途及び環境改善の爲めの用途とに三分される。道路を改良し橋梁を修築し港灣を設備するの行爲は環境改善の行爲である。かゝる行爲は、生産關係に利用せらるれば所謂「資本」的意義を有するが、消費關係に於いても亦、利用しうるものである。此の故に、かゝる關係を直接生産關係と云はずに、別個の即ち、利用施設或ひは環境改善の生活とするのである、要するに都市經營の諸事業中、直接財貨生産の生産に關係するものは少ない。之れ、先きに市民觀念と生活觀念とを結びつけた所に關係するものであつて、市民觀念は、此の環境利用の生活に主として結びつけられるものである、都市社會が、かゝる意味に於いての生活集團市民社會であるが故に、其の經營活動も、しかく限定されるのである。

以上述べた所を以つて大體、所謂「都市問題」なるものゝ內容を盡した。他の諸問題は以上の大別に附屬し又は之れに類屬せしむるをうるであらう。從つて次いでは是等の諸問題が如何に研究せらるゝかを論じて此の稿を了らう。

元來漠然と唱へられる都市問題なるものゝ中には少なからざる技術論が含まれる、然かも主として法制經濟の研究者には全然不向きなものが少くない。例へば同じ技術論としても市課稅上の財政經濟問題や市條例規則等の法律問題に就いては市政研究者が法律又は經濟學の研究者たる限り充分の知識を有す可きであるが、道路交通機關或ひは防災等の施設に關しては大體論以外に各々充分なる專門家と云ふを得ない。是等の問題を研究し或ひは論ずる場合に於いては技術的專門家の示教を俟たざるを得ない。都市計畫に於いて又然り、住宅問題にしても耐震耐火の建築は何が適當かの問題道路鋪裝の材料問題に對しては社會科學の研究者は全然無能力と云つて差支ない。是等の方面に對してかゝる研究者が

容喙する事は最も不遜たると共に危險な事である。故に吾々は經濟學又は社會學或ひは法律政治學の研究者として市政研究者となる場合には是等の技術問題からは先づ第一に手を引かねばならぬ。

かくて技術論中に於いても地方財政は、財政經濟學者に、法律問題は法學者に、政治問題は政治學者に、組織問題は經營經濟學者に指導せらるる可き領分である。都市研究が獨立の科學として成立せぬ限り（成立するとは思はれない、獨逸あたりで云ふコムミュナル・ヴィッセンシャフトは果して嚴格な意味での科學であるや否や頗る疑はしい。此の問題は今は取扱はぬが）兎に角獨立の學問的境地を有せざる限り、都市研究者は、自からは經濟學なり、社會學なり、法學なりに基礎を置いて、特別に都市問題を研究するの外はない。而して、かゝる補助的指導科學を求める限り、自己の專門に屬せざる部分については、先きに述べた自然科學的技術論と同樣に、未知であり他の研究の指導援用を受けねばならなくなる。換言すれば經濟學者はその都市研究に於いて、地方財政的、經營的方面には自己の研究に立脚しうるが法律的方面に於いては無能である場合がある。唯、この場合、先きの自然科學的方面とは異つて文化科學社會科學的方面を取扱ふといふ事に對しては共通點があり、それ丈け融通性に富むが、之れも唯、それ丈けの話である。

從來都市の政治學的、經濟學的考察の充分行はれて來た。しかるに社會學の擡頭を極めた、今日に於いては、都市研究を社會學的に考察する事が、あだかも、都市研究者の本來の立場である樣に思はれるに到つた。「都市社會學」の名稱は、都市研究者の研究が屬すべき科學的分野でゞもあるように。

吾々は、都市は社會學的に研究せらるゝものだ、との主張を排他的に爲すものではない。かうも研究せらるゝと云ふのみである。而して重に法制、經濟、或ひは社會の諸社會科學に關係する者、且つ之れに關係ある制度の問題としては、都市問題は、經濟學的、法學的或ひは政治學的更に社會學的に研究せらるべしと思ひ、經濟政治法律の諸點は從來より充分觀察せられてゐたから、今日は之れに附加するに社會學的考察を以つてせよと云ふに止まるのである。「都市社會學」が本當の意味で成立するか否かを問題にはしない。

此の研究上の分類に從つて吾々は前述した樣な都市問題を二大別し更にその

一つを二部に分つ。即ち先づ第一に、都市とは如何なる社會的存在であるか（Die Stadt als soziales Gebilde）に對して組織された都市の問題として、地方公共團體の問題がある。此の後者が更に二分せられてその一、市政組織、その二に都市經營。此の全體として三區分の中第一に該當するものは、社會學的研究、第二に該當するものは政治學的又は經營經濟學的、第三に對しては財政經濟學的或ひは茲で經營組織を論ずるならば再び經營經濟學的、更に是等活動の法律上の性質については、法學的研究が、適用せられる。地理學的研究は自然科學的方面に屬するものであるが、社會科學との混血兒として人文地理學的研究がある。しかし是等は此處の三大區分によれば第一のもの即ち社會學的研究の内に含まれてしかる可きものと思ふ。

要之「都市」は複雜なる現象諸相を有するが故に諸方面から研究せられる。しかし研究者自身が立脚する立場の混同は甚しく遺憾な事である。社會科學的研究の立場からは都市研究は當然、その範圍にのみ限定されて觀察せらるべきものである。その爲めに他の重要事項を逸しても、其れは差支ない。「社會學的考察」の流行する今日、所謂「都市問題」とは「社會學的に考察せられたる都市」を第一にし第二には「組織せられたる都市の政治組織」第三には同じく「組織せられたる都市の活動即ち經營論」の諸問題を取扱ふものである事を指摘する。そして、是等を米國市政論者の行ふ樣に總合して普通の市政學者、都市研究者が出來上るが、之れによつて「都市學者」が出來たわけではない。是等三大問題を包含しても、市政研究の大部分は所謂技術論に始終する、此の間、全然技術論でなく、聊かなりとも純科學的芳香のあるは、僅かに第一の「都市の社會學的考察」である。「組織せられたる都市」の諸問題は、大部分が技術論に始終する。此の方面の主題にして然らざるものを、第二、第三の項目に於いて論ずるとすれば是等は多少の科學的芳香をたゞよはす。かも知れないがそれ丈け第一の項目に接近して來る。社會科學研究の關係するところとしては、先づ是等の純科學的或ひはその芳香を交へたるものが第一にとらる可きであり、諸他の技術論は研究の第二義に置かるべきものではなからうか。

（昭和五年一月二十三日稿）